

# 犬の認知症



人間をはじめ、あらゆる動物にとって「老化」は避けられません。その「老化」の一つに認知症があります。認知症は動物の高齢化とともに増加しています。猫は認知症になると眠り続けることが多いのですが、犬の場合は、徘徊や鳴き叫びが激しく、ケアが難しいのです。

## 【症状】

- ・ 飼い主の呼びかけに反応しない
- ・ ぼんやりすることが多くなる
- ・ 昼夜が逆転した生活になり、夜中に鳴き続ける
- ・ 食欲旺盛なのに痩せる
- ・ 失禁
- ・ 徘徊
- ・ 円を描くように歩く（旋回運動）
- ・ 後ろに下がれなくなり、狭いところや部屋の隅から出られない

犬の認知症は平均すると 13 歳頃から現れはじめます。犬種では、柴犬や日本犬系の雑種が認知症になりやすい傾向があります。ただし、失禁が見られる場合は膀胱結石や膀胱炎、ぼんやりと元気がない場合は甲状腺機能低下症や緑内障など、一部に認知症と似た症状をもつ他の病気であることも考えられます。

## 【原因】

認知症は、老化現象にともなう脳障害などが原因で発生すると考えられています。脳腫瘍や水頭症、ジステンパー脳炎なども認知症の原因となります。

## 【治療方法】

EPA（エイコサペンタエン酸）や DHA（ドコサヘキサエン酸）などを多く含んだサプリメントや血管拡張剤などの投与により、症状の改善を図ります。効果が出るまで時間がかかる場合もあるので一定期間（1 ヶ月以上）は投与を続けます。夜鳴きなどの症状がひどい時には鎮静剤を投与する場合があります。

- 早期発見・早期治療が大切です。少しでも認知症と疑われる症状が現れはじめたら早めに診察を受けましょう。
- サプリメントを与えて症状の進行を抑えるようにしましょう。

## ★ 生活でのポイント

認知症の犬が、部屋の隅で動けずにいるようなことが多い場合には、お風呂マットを丸くつないで作る「**エンドレスケージ**」が有効です。その中で犬はぐるぐる回り続け、歩き疲れば眠るようになるため、鳴き騒ぐようなことが減少します。なお、この床にはマットやシーツを敷き、常に尿や便の後始末をきちんと行うことが大切です。



- ・ 夜鳴きが多い場合は、なるべく昼間は起こしておきましょう。
- ・ 屋外に出して日光や風に当て、環境に変化を与えましょう。
- ・ 失禁がある場合は、犬用オムツも市販されています。